

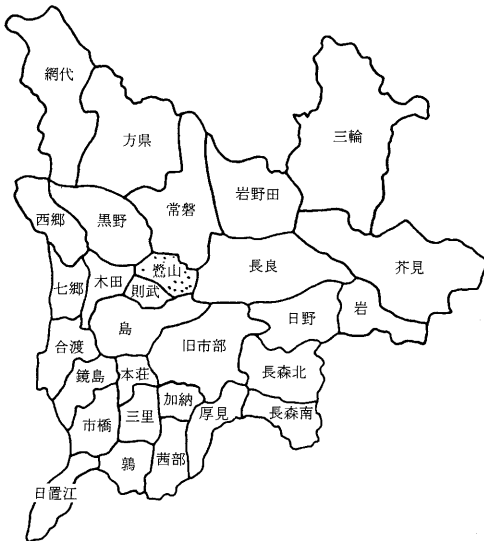
第一章 鷺山の自然環境

第一節 位置

位置 本地域は、濃尾平野の北部から中連山地（美濃山地）

の南縁部に広がる岐阜岐阜市のほぼ中央北西寄りにあり、鷺山小学校の絶体位置は北緯三五度二六分五三秒、東経一三六度四五分一八秒、海拔一四・三呎である。

東に長良西、北に島羽川をはさんで常磐と接し、西に伊自良川をはさんで黒野、南に旧長良川の古々川の左岸堤防跡を境に東より早田・則武と境を接しており、戸口は三、八三一戸（世帯）、一万二、二二〇人（昭和六〇年国勢調査）で、市内四九校下中第七位の人口である。稲葉郡鷺山村から岐阜市に合併した



岐阜市域図

第一章 鷺山の自然環境

長良地区



縮尺一万分之一



のは昭和一〇年六月一日で、当時の人口一、六三八人から見れば隔世の感があるが、これは昭和一四年の長良川右岸の締切工事により古々川の廃川敷が農地化、更に第二次世界大戦後における岐阜市の戦災復興、人口の都市集中により住宅化されたことに起因する。

更に都市環境線が本地域の西を南より北へ、更に東へ右折して岐阜・白鳥線（高富街道）と接続して、更に住宅街は拡大し、大きく変容しようとしている。

第二節 地形・地質

地形の概況 鷺山地域は、扇頂を岐阜市雄総付近とする長良川緩扇状地の北端に位置し、扇端は鷺山では伊自良川左岸まで達しており、東西が海拔一六呎より一二呎迄の範囲内にあり、ほぼ中央に鷺山（海拔六七・六呎）があり、以北は水田、以南は長良川が運んだ砂壤土の畑作地帯となっている。扇状地上とみる証據は下土居の安養寺裏の湧水池でわかるが、これも昭和四九～五〇年にかけて埋立てられ、知るよしもない。往時はこれらの湧水は、家事用の外農業用水としても利用されていた。現在は井戸よりの汲上げ水を利用している。

長良川右岸に属する本地域は、古川・古々川の旧河道が早田・則武地内との境にあったが、昭和一四年の締切り工事の完成により廃川敷となった。古々川の廃川敷は古川廃川敷とともに戦後宅地化され、本地域内の古々川廃川敷は、清洲・古川・西古川・白鷺・玉川・若水・月見・若草・緑ヶ丘・千草の各町を生み、一大住宅街と化し、僅かに正木川が旧河道のしるべとなっている。

中連山地 本地域の周辺部には海拔二八〇～四一八呎の山嶺が連亘し、何れも古生代末に形成された秩父古生層で、チャート・砂岩からなる。

本地域の北東部に聳立する百々ヶ峰（三四一呎）を最高とし、それより北西に城が峰（二八三呎）また南側には金華山（三三八・五呎）が分布する。これ等の山地はそれぞれ長良川と鳥羽川及び伊自良川によって切断され、壮年期的開析を受けた山塊を呈している。また地域のはば中心に砂岩で構成される鷺山（六七・六呎）が散点的に分布している。

平地 中連山地の南側には海拔二〇呎前後を最高とする緩やかな傾斜が南南西に伸び、伊勢湾に入る寸前で海拔〇呎となっている。本地域は長良川と鳥羽川が運んできた土砂礫で構成される沖積地である。

本地域を含めて長良川左岸は、現在の左岸堤により水災害は防止されているものの、長良川の旧河道であり河床地であるために、以前は、増水のたびに水災害が発生した。昭和五一年九月一二日（九・一二災害）の災害時にはこの旧河川敷を中心にして、内水が流れ、災害を生じた。

本地域の地質は古生代末期に形成された秩父古生層（二億三、〇〇〇万年前）と、新生代第四紀沖積層（一万年前～現世）に大別される。

秩父古生層 三億五、〇〇〇万年続いた古生代も、今から二億三、〇〇〇万年前に終わりとなった。

当時日本は海の底にあって陸地はなかった。海底では、進化を続けてきたサンゴ・腕足貝・紡錘虫（フズリナ）・三葉虫・コノドント等が、きれいな海で生活していた。ところが古生代の終わり頃から地殻変動が起こり始め、海底に眠っていた日本は陸化（造山運動）し、現在見られる山脈が出現した。養老山脈・伊吹山脈を始め、城ヶ峰・百々ヶ峰・金華山・鷺山等はこの時代に海から顔を出した山々である。

金華山・百々ヶ峰・城ヶ峰の山々は、チャートといって硬い珪質からなる岩石で、昔は火打ち石として火を起こす道具に利用したり、矢じり石として利用されていた。このチャートの中からコノドントの化石が発見されている。

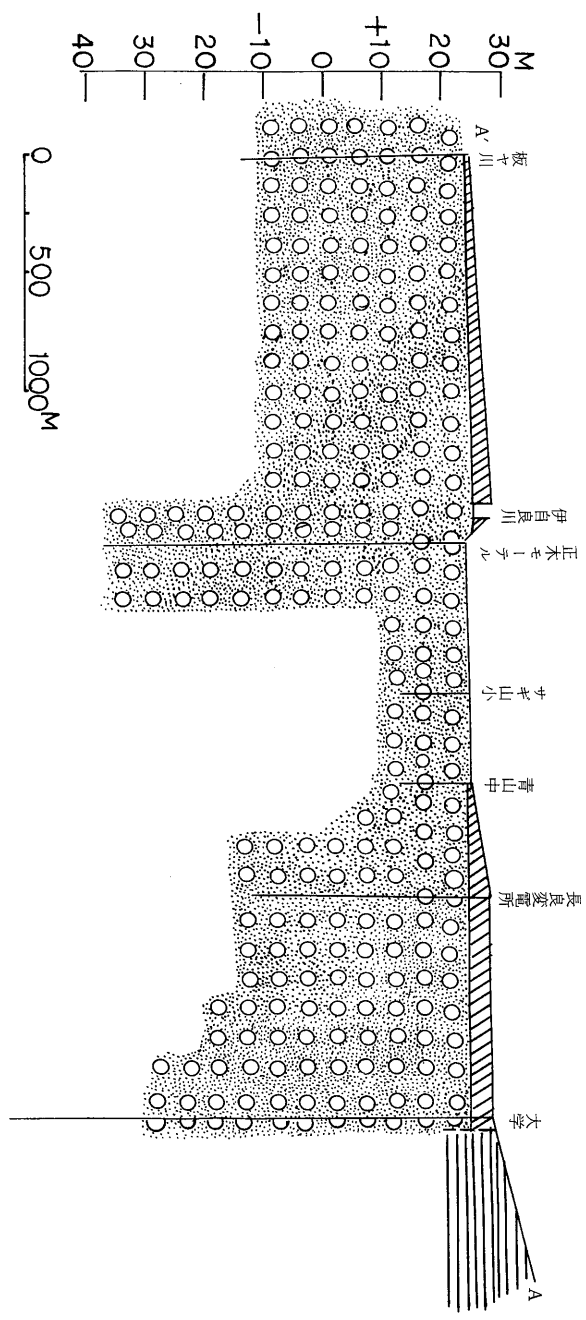
雄総山・上土居山・鷺山等、一〇〇呎以下の低い山は砂岩で構成されている。現在までには、これらの山々から化石は発見されていない。地域外の養老山・伊吹山を始め、大垣市北西の金生山等は石灰岩層からなり、特に金生山からは、三葉虫・サンゴ・腕足貝・紡錘虫（フズリナ）等の化石が多産し、世界的にも有名である。

沖積層（濃尾平野） 金華山と雄総山の間を貫いて長良川は平地に達し、南々西方向に流路をとって流れているが、昔はそうと決まらなかった。

川筋の変遷 長良川の流路の変遷を『稲葉郡志』は、「長良川、従来の河川は山県郡中屋にて右に流れ、太郎丸・高富・梅原を経て伊自良川を入れ、方県郡岩利から南流し、交人・今川・折立・黒野を経て同郡木田村に至り、津保川の下流（当時の長良川古川）を入れ、南下し、尻毛・江口に流れたりしが、天文三年（一五三四年）九月六日の大洪水に、山県郡千疋・側島・戸田村の間を破堤し、各務郡芥見村にて津保川を合わせ、二川一大河となり、下流方県郡長良村に至り、厚見郡早田村馬場にて井水口を破りて新川（井川と称し、現長良川）を生ぜり。」と記している。これには異見もあるが、川筋に変化のあったことは考えられる。

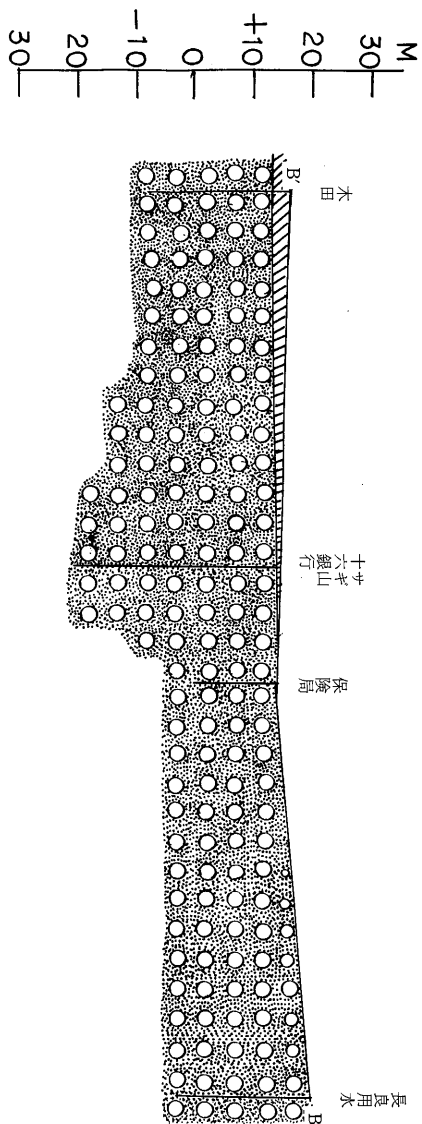
地質構造 長良川は山間部を貫いて突然平地に達すると、運んできた土砂礫を平地（当時は海であった）に堆積し、厚さを増しながら扇状に幅も広め伊勢湾まで到達した。しかし、簡単に伊勢湾まで埋めたてていったのではなく、その間に海底がどんどん沈下し、なかなか埋めたてられなかった時もあった。

大垣市・安八町・海津町では、三回にわたって沈下したことがわかっている。海津町では地下三〇呎と一三〇呎附近



- 凡例
- 古生層
 - 泥又は粘土
 - 砂利又は砂礫

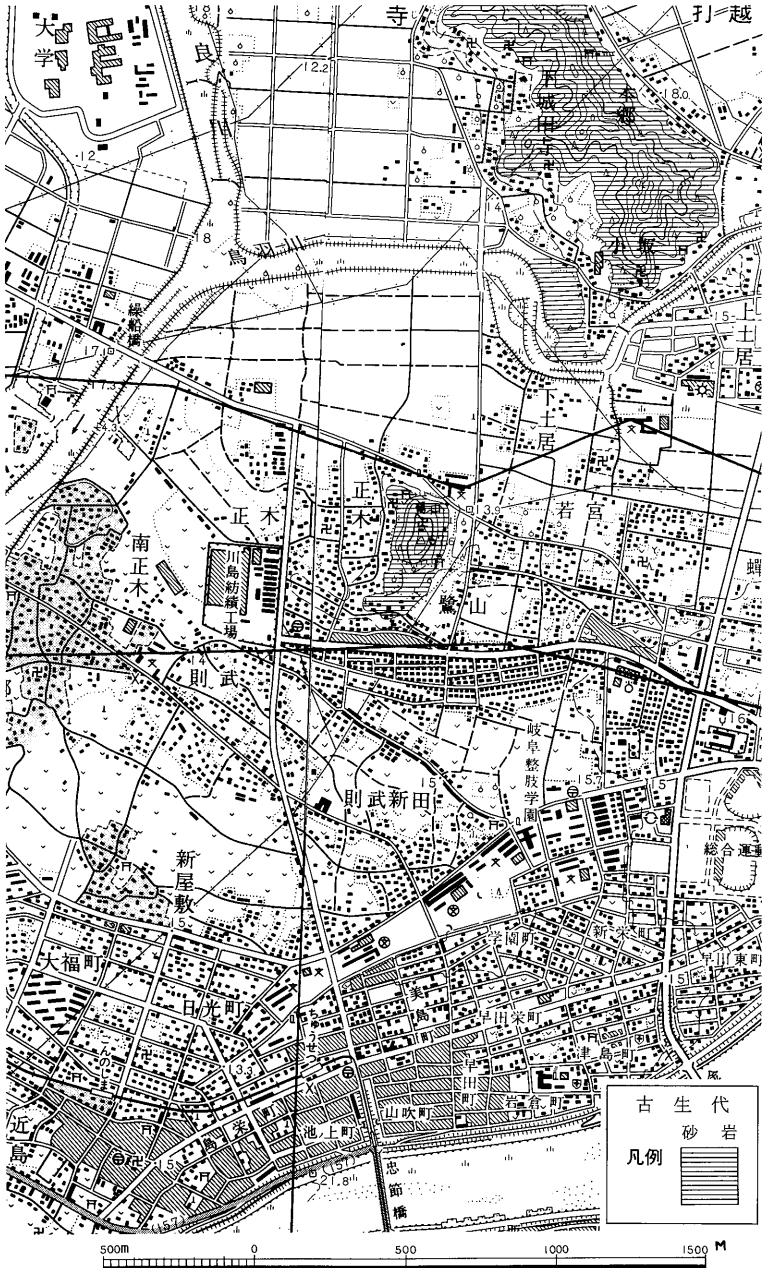
鷺山地域の地下地質構造図



鷺山地域地下質構造図

鷺山地域地質概略

第二節 地形・地質



に化石層があり、大垣市附近では地下六〇メートル前後から化石層がある。化石はシジミ貝で現世のものと変わらない。一般に浅海に生息する貝で、これが地下深い所から産出するのは沈下した証拠である。

鷺山地域の地質構造 鷺山地域の地下地質構造は、上部は泥または粘土^{ねんど}で、その下部は砂混じりの砂利^{じやり}または砂礫^{さど}になっている。地表面は長良川の南西方向と同じく緩傾斜している。

長良川により運ばれた土砂礫は多少曲折はしているものの、長良太田と正木を結ぶ東西の南側にあって、頭大から小指に至る円礫で、現在長良川流域に分布する流紋岩・花崗岩・安山岩・チャート・砂岩・粘板岩・石灰岩と同一のものである。また伊自良川・鳥羽川に運ばれてきたものは、こぶし大以下のチャート・砂岩・粘板岩を始め、それらの破屑された砂利で構成され、前者の以北に分布している。

第三節 気 候

温和な気候 本地域が入る岐阜市は地形的に見て山岳・平野の中間地帯に位置し、年平均一五度C、降水量年平均二〇



天明二年の川北地区の諸河川 (河田録氏提供)

表1 気 象 の 平 均 値

本表は昭和16～45年の30カ年の平均値を表章したものである。

第三節
気

候

月 別	平均 気温	平均 温度	降水量	平均 風速	日照 時間	天 気 ・ 現 象 日 数					
	°C	°C	mm	sec	hr	不照	雨 (1mm 以上)	雪	霧	雷電	暴風
年	14.7	73	1,903.6	2.4	2,321.8	45.8	119.5	26.3	10.5	14.9	15.6
1月	3.3	73	69.2	2.4	173.3	2.5	8.9	10.1	0.8	0.0	1.5
2月	4.0	68	73.1	2.7	180.7	2.7	7.5	8.1	1.1	0.0	1.5
3月	7.3	65	120.1	2.9	211.2	3.9	9.7	3.6	0.6	0.1	3.0
4月	13.0	68	177.1	2.7	207.9	4.6	10.9	0.1	0.5	0.5	2.3
5月	17.9	72	197.6	2.5	223.8	4.2	11.6	0.0	0.7	0.8	1.5
6月	21.7	77	284.9	2.3	179.4	6.0	12.9	0.0	1.3	1.7	1.1
7月	25.8	79	255.8	2.1	198.4	4.7	13.3	0.0	0.5	3.6	0.5
8月	27.0	77	173.6	2.3	244.9	1.9	9.7	0.0	0.4	4.9	0.8
9月	22.9	78	251.6	2.1	168.2	4.7	11.9	0.0	0.9	2.6	0.3
10月	16.8	74	139.7	2.1	188.3	4.7	8.8	0.0	1.0	0.4	0.8
11月	11.3	72	84.3	2.1	180.0	3.5	7.3	0.3	1.0	0.2	1.1
12月	6.0	74	66.4	2.1	164.8	2.4	7.1	4.2	1.7	0.0	1.2

資料 岐阜地方気象台

表2 霜・雪・結氷等の日数

年 次	霜			雪			結 氷		
	初 日 月 日	終 日 月 日	初終間 日 数	初 日 月 日	終 日 月 日	初終間 日 数	初 日 月 日	終 日 月 日	初終間 日 数
昭和44年	11.6	4.6	152	11.25	3.25	121	11.27	3.27	121
45	11.12	4.11	151	11.29	3.14	106	11.25	3.18	114
46	11.9	4.10	154	11.29	4.1	125	12.2	4.2	123
47	11.1	4.6	157	12.1	3.26	116	11.25	3.27	123
48	11.14	3.29	136	11.19	3.24	126	11.19	3.29	131
49	11.11	4.1	142	12.6	3.1	86	11.15	3.2	108
50	11.11	4.10	152	12.23	3.23	92	12.1	3.25	116
51	11.18	4.4	140	11.29	3.6	98	11.16	3.21	126
52	11.24	4.8	136	12.25	3.14	80	11.24	4.5	133
53	11.21	3.28	128	11.29	3.2	94	11.30	3.22	113
平 均 値 (昭16～45)	11.13	4.11	150	12.14	3.19	96	11.23	4.1	131

資料 岐阜地方気象台

○〇ミリメートルと、概ね温和であり、夏は高温で降水量が多く、冬は比較的温暖で大陸高気圧の支配を受け、温帯モンスーン気候の特色をよくあらわしている。わが国の中では、東日本型（東海型）気候に属する。

風 特徴としては、冬季に複雑な変化を見せ、季節風に顕著な例を見る。

日本海を渡って来た冬の季節風は、若狭湾より近江盆地に入り、これが伊吹山脈を越えて厳しい北西の季節風となり、俗に「伊吹風」と呼ばれる特有な風となり、冬の雨量（積雪）となっている。

大正・昭和の県下最大瞬間風速

順位	値	年 月 日	備 考
1	E S E 44.2	S.34.9.26	伊勢湾台風
2	S E 41.1	S.36.9.16	第二室戸台風
3	E S E 38.7	S.9.9.21	室戸台風
4	S E 37.1	T.10.9.26	
5	S S E 36.5	S.25.9.3	ジェーン台風
6	S E 35.0	S.26.10.15	ルース台風
7	S E 33.0	S.37.8.26	台風14号
8	S S E 28.8	S.39.9.25	台風20号
9	S S E 27.2	S.29.9.26	洞爺丸台風
10	S S E 26.7	S.12.9.11	

気象（平年） 岐阜地方気象台調 S.60

項目 月 別	気 温 (℃)			平均温度	降 水 量	日照時間
	平 均	最 高	最 低	(%)	(mm)	(hr)
1 月	3.6	8.4	-0.3	71	67.6	172.0
2 月	4.4	9.5	0.2	68	81.0	174.6
3 月	7.6	13.1	2.8	63	118.4	213.8
4 月	13.5	18.9	8.7	67	206.0	197.3
5 月	18.1	23.5	13.4	70	201.6	220.5
6 月	21.9	26.5	18.2	76	283.7	173.4
7 月	25.9	30.2	22.6	79	300.4	184.8
8 月	27.0	32.0	23.5	76	193.4	223.3
9 月	22.9	27.7	19.4	77	258.4	165.0
10 月	17.1	22.5	12.8	72	131.3	186.3
11 月	11.5	17.1	6.8	70	87.0	177.1
12 月	6.3	11.4	2.1	72	168.5	156.6
年 間	15.0	20.1	10.8	72	1985.3	2256.8

※最低-14.3度（昭和2年1月24日）、最高38.6度（昭和7年8月2日）

風は年平均二・四呟で、春は東寄り、夏は南、秋から冬へかけては西または北西の季節風となり、春先は三月末まで北西の季節風の影響を受ける。年間を通じれば西または北西の風が多いと言えよう。

八月末から九月には台風又来襲があるが、地形からみて直接通過することは少ない。台風の場合、山陰沖から能登半島沿いに東進するか、四国沖・紀淡海峡から若狭湾へ抜ける場合、この附近では東寄りの風が吹き始め、南東の風向を示す時、最大風速を示し、平均二〇呟〜二五呟と言う記録となり、瞬間的には別表のように昭和三四年九月二六日の伊勢湾台風では、東南東の風、四四・二呟を記録した。

しかし、統計的に見ても風水害等の気象的天災の少ない平穏な暮らし易い土地といえる。

第四節 生 物

概況 鷺山（海拔六七・六呟）以外には山はなく、古々川の河川敷も戦後の戦災復興の折の住宅不足解消の余波をもろに受けて住宅街と化し、水田地帯も耕地整理事業や交通路の拡大（都市環状線）により、乾田化し、かつての池や

明治・大正・昭和の県下1日間最大降水量

順 位	値	年 月 日	備 考
1	260.2	S.36.6.26	梅雨前線豪雨
2	257.2	M.29.7.20	
3	243.0	S.49.7.25	梅雨前線豪雨
4	242.1	M.29.9.7	
5	219.0	S.51.9.8	17号台風豪雨 8日～12日 5日間831.5mm
6	206.2	T.5.6.17	
7	203.9	M.29.9.8	
8	199.4	M.29.9.9	
9	187.7	T.2.10.3	
10	183.0	S.36.9.14	第2室戸台風

沼・湿地（北西部＝鳥羽川沿いに多かった）が姿が消し、激甚災害指定による災害復旧事業の進展に伴ない、河川の様相も大きくその姿を変容した。特に堤防の内側のコンクリート張りの補強により、動植物の生息・生育に大きな変化をもたらした。

動物 戦後にその姿を消した筆頭には、鳥羽川のゲンジボタルを挙げることができる。戦前は、鳥羽川・伊自良川の至るところでゲンジボタルが初夏の夜空を飛びかい、世に言う「ホタル合戦」が見られたものである。鷺山では天神川合流附近から互調橋下流で数多く見られたが、昭和四〇年代前半にはその姿を全く見るこゝとができなくなってしまった。最近では僅かに残る下土居周辺の竹藪周辺で、ヘイケボタル・ヒメホタルが少し見られるようになった位である。これは古くは農薬、そして生活污水の流入量の増加による汚れが、ホタルの幼虫やその餌のカワニナの生息に大きな影響を与えたといえよう。

そのほか、キツネ・タヌキ・ノウサギも嘗^かつては河川敷や堤防・鷺山周辺に見られたが、今は全くいなくなってしまう。イタチも昔は水田地帯などで見ることがあったが、一時全く見ることがなかった。しかし、近年、僅かばかり見ることができるようになった。鷺山の名の起こりは「サギが生息していた山」とも言われるが、定かではないようである。然し四季を通じてコサギ、時にはゴイサギが採餌に水田地帯や鳥羽川・伊自良川で見ることができるといえる。前述のように池



白鷺の群（天野敬也氏提供）

沼の類が全くその姿を消してしまつたので、サギの外はカモ等数種の水鳥以外見ることが少なくなり、ツバメなどの渡り鳥もその数を減らしている。ふえているのはヒトとのかかりあいのできるスズメ・キジバト・カラス・ドバト位と言へる。トビも若干ふえ、堤防附近で見ることができるようになった。

河川では汚染に強いと言われるフナ・コイは、放流の故もあるが自然繁殖もしている。しかし、清流域を生息範囲とするアユ・タナゴはその姿を鳥羽川・伊自良川水域では見られない。唯、シラハエ・ウグイ・ムツなどは昔と同じようにみられる。イシガメ・スッポンも見られるが、ゼニガメを見ることがむづかしくなっている。ヘビ・トカゲの仲間も住宅化の波を大きく受けて、この附近では近年その姿をみるのが少くなつた。

ウシガエル（食用蛙）もその生息場所をうばわれ、河川やその水門付近に存在しているが、アメリカザリガニは水路や天神川・正木川でも多く見られるし、カムルチー（雷魚）もまだ河川で見られる。イタセンパラは国の天然記念物として昭和四九年六月二五日県内の水域で指定されているが、昔は鳥羽川・伊自良川には幾らでもいたものである。まぎらわしいタナゴがいるが、これは外来種のタイリクバラタナゴである。

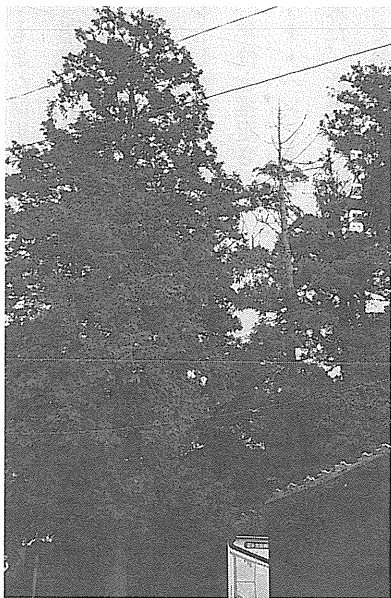
植物 植物も動物と同様すっかりその様相を変えたと言っても過言でない現状である。昔日の面影を残しているのは、鷺山北西部の白山神社域であり、ツブラジイ・アラカシを中心とした照葉樹林となっている。この社域五〇〇〇平方呎は岐阜市指定の保護樹林となっている。樹齡は一二〇―一三〇年位と推定される。この社域を含めて鷺山全体はアカマツを中心にした里山級であり、この外にサカキ・ナラ・アベマキ・ハンノキ・アカメガシ・ヌルデ・クサキ・ヤマハゼなどが混在し、近年は特に山の肥育化が進み、雑木林化して来た。近年この山中に地主の了解の下に、ソメイヨシノを中心にしたサクラの植樹が行われ、早いものは四―五呎になっており、鷺山がサクラの花で埋まるのもそんなに遠くない。

いことであろう。

北西部の湿地帯には、ヨシ・アシの類がみられたが、これもなくなり、僅かに鳥羽川合流点やその下流に見られる程度となった。堤防や水田・水路周辺の草本性植物も、幾度かの改修の結果、その種類も激変し、ラン科のモジズリなど滅多に見られなくなった。伊自良川等の水辺植物も同様であり、自然のまま残っているものでは、操舟橋附近のコウホネの群生位となり、新堀川のコウホネ・ヒシ・アシも残り少なくなっている。そのほか、エビモ・マツモ・クロモ、またミズオオバコ・ヒツジグサ・トチカガミも僅かに水路や休耕田に見られ、ウキクサは水田に水が入る頃より毎年見ることができる。

農業用・生活用・食用と幅広い用途を担っていたタケ（竹林）は、かつては堤防や山すそ、家の北または西に、防風林も兼ねてあったが、戦後の生活様式の変化により、食用としてのモウソウチクが、鷺山の東西の山すそや鳥羽川の堤防の一部に、マダケが西正木の新堀川沿いに僅かにみられるのみとなった。シノダケも河川改修の進展により、現在は操舟橋下流に散見されるだけとなった。

動物と同じく外来種では、戦前からのヒメジョオン・シロツメクサ・ヒガンバナは今も堤防周辺に多く見られるが、戦後のセイダカアワダチソウ・キダチコンギク・ブタクサ等は、荒地や堤防に見られるようになった。



白山神社の樹林（天野敬也氏提供）

池沼 昔、幼い時代のよき遊び場所として、あるいは農業灌漑用水池として大切な自然環境施設であった主なる池沼を列記する。

中洙池

場所 中洙一七六七番地ノ一池沼 一反四畝〇九歩

〃 一七五〇番地ノ三池沼 一畝二四歩

中洙池は、鷺山の山東南麓にあって、明治初期まで鷺山村当時の池沼としては最も大きな池であった。現在はその原形はとどめていないが、古川の外堤（現在の簡易保険局事務センターより北野神社まで）と、内堤（現在の簡易保険局事務センターより鷺山観音堂登口道）の間にあって鷺山城跡と思われる位置の東南の山麓にあり、斎藤道三が長良川の水を一キロ余りにわたって運河で城内に引き入れ、林泉の美をもって築庭した庭園の一角であるといういい伝えもあるが、いまこれを証するものはない。

穴田池

場所 穴田一〇五一番地の二池沼 五畝二八歩

〃 一〇五三番地池沼 五畝二〇歩

〃 一〇五二番地池沼 四畝一七歩

〃 一〇三三番地池沼 一反一畝〇五歩

穴田池は、岐阜市北部体育館の附近である。現在は市体育館の建設によりその原形や面影は全くない。面積は約二反七畝余りで、昔鳥羽川の決壊により池沼が生じたとか、あるいは、鳥羽川改修工事の築堤の土量採集から池沼が生じた

という説もある。

鳥羽川の堤防南岸で河道敷の関係もあってか、水量は豊富な清水で、夏になると子供達の水泳場でもあった。湿地地帯であるので大洪水の度に冠水になり、魚類の生育により魚釣り池として、また、秋のヒシの実時期には親子連れの姿がアチラ、コチラによく見うけられたものであった。

乙井池。

場所 乙井五二六番地池沼 五畝〇六歩

〃 五二五番地池沼 一畝二八歩

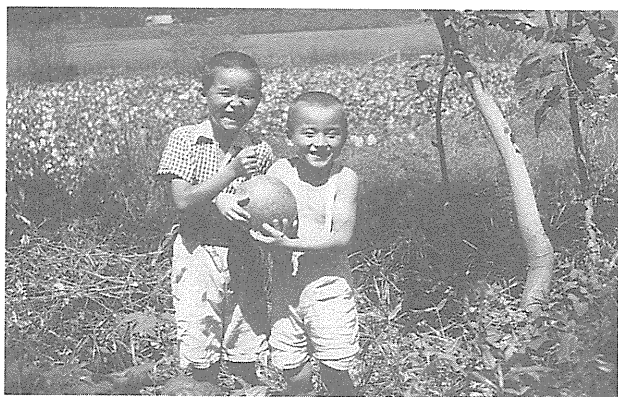
〃 五三八番地池沼 一畝〇八歩

〃 五九六番地ノ二池沼 二畝二八歩

乙井池は、下土居安養寺の北側の池で以前まであった池沼である。

古老の説によれば、昔鳥羽川の決壊により池沼が生じたとのことで、その後河道敷の関係で、年中水が吹き、水量を保ち農業灌漑用水として利用されていた。また、魚類が多くすみつき、地元の人を初め遠くから魚釣りの人が訪れ、釣り場として楽しまれていた。更に秋になるとヒシが繁茂して、長い竿をもって、アチラ、コチラにヒシの実取りの光景が見られた池であった。

この他、古老の話によると、昔、古川の外堤の決壊により池沼が生じたとかいう。



乙井池に繁茂する「ほてい青い」（岩佐甚市氏提供）

魚も生息していて小学校帰りによく遊んだ魚釣り池もあった。近くに住宅があつて池の周囲に柳の大木が繁り、夏になるとセミがよく鳴いたところで、池にはまこもが繁茂してヒキガエルの鳴き声が格別幼い頃の思い出として残る池でもあつた。

鷺山一番地の土居と池 約五〇年前北野神社の参道から草平町鷺山観音の前を通過して本通りに出る道路は堤防であつた。何年位前なのかその堤防が決壊して出来たのが小笹池とくそ池だそうである。

北野神社から二百餘位北よりの山下から東へ（現在NTTの駐車場あたり）土居が東にのびて築かれ、参道の堤防二百餘位の所で合体していた。小笹池とくそ池はこの土居の外に出来ているのである。即ち堤防より土居の中は水害をのがれたことになる。辞典を見ると堤防は河川の水の出るを防ぐ為の築造物とあり土居とは城の周囲の土の垣とか土手とかとある。斎藤道三の時代までもいかなくも庭か住まいかと思ひめぐらし楽しい。椿の下には金のちゃぼが埋けてある。そうだと親たちが言っていたものだ。戦国の頃の墓碑一基草むらに沈んでいた。無名でもあり近くの墓地に移してある。大きな松の木元に神明社跡と彫られた石碑は北野神社の境内に移された。長良橋の北側の神明池とかかわりあるのだろうか。この地からどこへ移られたのか今後の課題としよう。

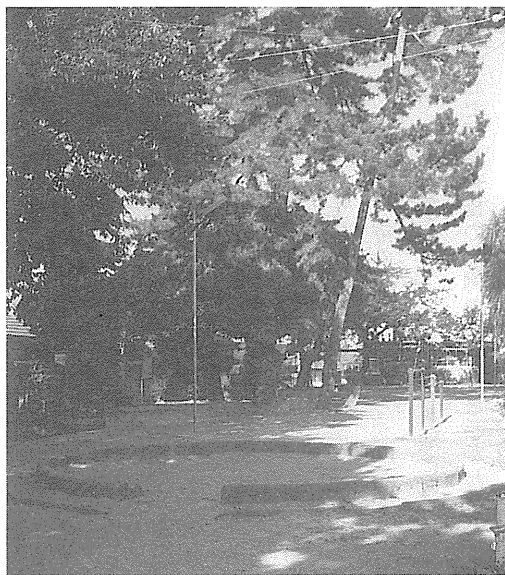
小笹池（約五百坪）くそ池（約百坪）は湧き水であつた。大きい池は、養蚕道具や野菜を洗ひ小さい池はおしめ等不淨物を洗ひ大切な池で特に小笹池は、泳いだり、タライに乗ってヒシの実を採ったり、コイやフナ・ナマズ等が棲み、かつこの遊び場であつた。食用ガエルも数多くいてごうごうと鳴き合う頃、長良川の鵜飼が始まるのであつた。

上鵜飼は城山の北の方に、下鵜飼は長良橋のあたりか、庭からほのかな鵜かがりの明かりを心なごむ思いで眺めた。ホタルも楽しませてくれた。クワの葉の盛りの季節になると、昼なお暗き道であつたくらい桑畑が、食糧難の時代と

なるや野菜畑に変わっていった。敗戦後、清洲町が出来、次々と市営・県営住宅、保険局、川島紡績と住宅化されていった。この頃から池の水が噴かなくなり遂に埋め立てられた。同時に土居も壊されて、N T Tのビル二棟の一角に変わった。食用ガエルの声も懐しい語り草となってしまった。今日我が家の裏山の下に小さいヒメホタルが静かな一時間頃から光り始め三〇匹位は居る。ここ三、四年は見えていないが、今年はその気になって見きわめたいと思う。せっかく飛び出したものの、あたりの電燈の光でとまどってしまうのではなからうかといとおしい。

今もその面影残れる松林

土地の古老の話によると、古々川には昔、松の植林がなされたようである。現在の鷺山一五四三番地の四八（現在の二本松公園）附近から東へ鷺山一七六九番地の二（元鷺山支所）附近に至る約三二〇畝の間、ある一定の巾に畑の土手に畑の流失を防止するために樹齢約一〇年余りの黒松が繁茂しておった。通称大松林といわれて、現在の正木郵便局の裏の松林を小松林と土地の人達はいってあった。植林時期は判明しないが樹齢から見ると、江戸時代末期か、明治初期頃ではなからうか。元鷺山支所東約三〇畝附近より西に向って堤防も、やゝ低い関係もあって流水対策の一環とも考えられる。住宅建設の際伐採されたが、当時の面影として今は「二本松公園」が残っている。



二本松公園（天野敏也氏提供）